

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	渡邊由貴
論文題目	思考動詞による文末表現の史的研究
審査要旨	
<p>本論文は、「と思う」のような思考動詞による文末表現について、その種類とはたらきなどを通時的に明らかにしたものである。日本語では、推量的な判断を表わすときに思考動詞による文末表現を用いることが多く、特に現代語では使用頻度も高く、欠かすことのできない表現形式となっている。その一方で、古典語はもとより、現代語でも、類似の働きをもつものとして、「だろう」や「でしょう」のような助動詞による推量表現があり、歴史的にはこのような助動詞による推量表現が一般的であった。本論文では、「と思う」が、本来有していた多様な表現上のはたらきの中から推量表現に準ずる用法を獲得する過程や、「と思う」以外の思考動詞による文末表現の種類とそれらの史的展開、思考動詞による推量表現と助動詞による推量表現の違い、近代日本語において思考動詞による推量表現が広く用いられるに至った背景などについて、広く考察されている。</p> <p>具体的には、平安時代から近現代に及ぶ大量の日本語資料によって、「と思う」「と思われる」「と存ずる」などの文末思考動詞による表現の用例が採集され、それらの使用時期や用法上の特色、助動詞による推量表現との違いなどが明らかにされている。思考動詞による文末表現については、そのような表現が比較的、多く用いられる資料と、あまり用いられない資料とのかたよりが大きく、有効な資料の発掘にも多大の労力を必要とするが、近世、近代の洋学資料や演説速記などを含め、各時代の資料を広く見渡し、どのような性格の資料に思考動詞による文末表現が多く用いられるのかについても見通しをたて、思考動詞による文末表現を史的展開として捉えうる段階に到達している。</p> <p>論文の全体の構成としては、まず序章において論文の構成と目的を述べ、先行研究の確認等を行ない、本論文の位置づけを明確にしている。以下、第1章から第8章まで、概ね、時代順に、各時代の資料によって、思考動詞による文末表現の状況が明らかにされている。第9章において、文末思考動詞と文語助動詞「べし」との関係を確認した後、終章において、論文全体のまとめと今後への展望と課題が述べられている。</p> <p>第1章は、最も代表的な思考動詞による文末表現である「と思う」を取り上げ、中古から近代まで、広く見通したものである。これによって、「と思う」の内部に意志・願望をとる用法が最も早く生じ、続いて推量・疑問をとる用法が現れ、遅れて判断・叙述をとる用法が現れること、つまり、「と思う」による推量表現は、主観的な判断を受ける用法から出発して、より客観的な事態に対する推量としての用法を獲得していったのであろうという、思考動詞による文末表現の展開の大きな見通しが明らかにされている。</p> <p>第2章から第4章は、中世を中心に、思考動詞による文末表現の展開を具体的に確認したものである。これらによって、「と思う」以外に、「と存ず」や「とおぼゆ」といった文末表現の使用状況などが明らかにされている。文末表現として広い用法を持っていた「とおぼゆ」の衰退を受けて、これにかわり、口語的表現として、「と思う」の使用される領域や頻度が増したのではないかと推定されているが、これは多様な資料を通して広く思考動詞による文末表現を見渡したことによる成果と評価してよいであろう。</p> <p>第5章から第8章までは、思考動詞による文末表現が著しく増加した近代の資料を取り上げ、論説文、洋学資料、国定教科書、演説速記などによって、近代日本語における思考動詞による文末表現の広がりを具体的に跡付けている。論説文の資料では、「と思う」の使用が口語文にかたより、文語文には現れにくいこと、洋学資料では、「と思う」の文末表現それ自体が欧文直訳と密接な関わりをもつか、明確には確認できないが、「と考える」「と信ずる」といった思考動詞のバリエーションをもたらしていることが指摘されている。また、標準的な日本語の反映と見なしうる国定教科書での使用の広がりや、演説速記における用法の</p>	

氏名 渡邊由貴

広がりと定着が明らかにされている。

第9章は、いわゆる推量の助動詞と思考動詞による文末表現とを相互の関わりの中で捉えようとした試みである。助動詞「べし」が衰退していく中で、新たな推量の助動詞である「だろう」では代行しきれない用法を思考動詞による文末表現が担っているのではないかと推定されている。一般に、表現と表現との直接的な交替の関係を立証することは困難であるが、ここでは丁寧な調査にもとづいて、説得力のある仮説になりえているものと考えられる

以上の通り、本論文は、思考動詞による文末表現を広い時代にわたり、膨大な資料によって跡付けたもので、思考動詞による文末表現の展開について、十分に説得力のある論証を積み重ねて、大きな見通しを構築するに到っている。思考動詞による文末表現の展開を実証的に明らかにした研究としてすぐれた成果であり、博士学位を授与するにふさわしい論文であると判断する。

公開審査会開催日	2016年10月8日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高梨 信博	日本語学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	上野 和昭	日本語学	博士(文学)早稲田大学
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	森山 卓郎	日本語学	学術博士(大阪大学)